

令和2年度ティーチングポートフォリオ（簡易版）

森山 洋美（准教授）

1. 教育の責任

私は、食物栄養学科において栄養士過程「栄養と健康」領域の科目である「応用栄養学（1年前期、栄養士必修科目）」、「応用栄養学実習（1年後期、栄養士必修科目）」、「栄養の指導」領域の科目である「栄養指導論Ⅰ（2年前期、栄養士必修科目）」、「栄養指導論Ⅱ（2年後期、栄養士必修科目）」、「栄養指導論実習（2年後期、栄養士必修科目）」を担当し、ライフステージに応じた栄養アセスメントや栄養教育、栄養指導に関する技法や栄養ケア・プログラムの一連の流れを理解できるように指導している。栄養士科目以外では「スタディスキルズⅠ（1年前期卒業必修）」「スタディスキルズⅡ（1年後期、卒業必修科目）」、「特別研究（2年通年、卒業必修科目）」を担当し、調査方法及び研究の流れや進め方、まとめ方に対する助言及び指導を行っている。さらに幼児保育学科保育士専門科目である「子どもの食と栄養Ⅰ（2年前期、保育士必修科目）」、「子どもの食と栄養Ⅱ（2年後期、保育士必修科目）」を担当し、子どもの食や食育について指導を行っている。その他、2年生のクラスアドバイザーとして学生が円滑に学生生活を送ることができるよう履修指導や学生生活の他、進路についての支援を行っている。科目以外には学生食育プロジェクト「おむすび」を担当し、幼児や地域での食育活動を通し、現場で求められる実践力育成を目指し、学生による地域活動の支援を行っている。

2. 教育の理念と目標

私の教育理念と目標は専門職として必要な知識や技術を習得し、それらを実践で活かすことができる「応用力」を身につけた人材の育成することである。本学の教育理念である「価値の多様性を理解する豊かな人間性と自立して生きていくために必要な実学を身に着ける」ために積極的に地域や社会にかかわり、新たな知見や情報を収集し活用できるようになってほしい。さらに、栄養士は対象をよく理解し、各個人に沿った栄養サポートや食事提供をすることが望まれる。そのためにも客観的に物事を理解し、その時に最善の支援につながるよう自分の知識と技術を統合し応用できるようにしている。また、栄養士にはコミュニケーションスキルが求められることから、積極的に人と関わり、まわりと協力して物事に取り組む機会を取り入れている。（根拠資料①②）

3. 教育の方法

私が担当する科目は1年前期から2年後期まですべての Semester に配置されていることから、他の科目とのつながりや継続した学びを意識できるよう働きかけている。

また、栄養士や保育士として何が求められているのかを知るために、新聞、雑誌、ニュースなどから自分の領域に関する最新の情報や話題を収集し随時レポートを作成させている。教科書以外にも必要に応じて食を取り巻く現状や課題について参考資料として配布している。

実習においては現場で活用できるテーマを設定し、技術と知識を統合し、実践できるようにしている。特に応用栄養学実習では、テーマに沿った献立作成及び調理だけでなく、給食便りなどの媒体作成を行うことで習得した知識を活用できるようにしている。中でも高齢期の栄養については疑似体験を通し、対象の理解を深める他、系列の高齢者施設管理栄養士の先生に授業に参加していただき、現場での調理の仕方やポイントなどを学生に指導いただいている。さらに、今年

度は授業内で全学生が系列の施設にうかがい、おやつを提供、喫食状況の見学を行うことで対象の理解につなげている。他に系列保育施設の栄養士に授業に参加いただくなど、現場での栄養士の仕事を意識できるように心がけている。栄養指導論ではこれまで学んだ専門科目の知識を活用できるよう、ケーススタディを多く取り入れるようにし、授業で学習したことを振り返るとともに、栄養士の実務を意識できるよう工夫している。(根拠資料③④)

4. 評価と成果

応用栄養学については専門知識のベースとなる科目であることを意識して授業を行っていたが、授業評価アンケートでは前年度より良く評価であった。コロナ禍であることや本学での ICT の促進がされていることから、今年度から板書ではなくスライドを用いて授業を進めたことで講義内容をしっかり確認できるようになり、理解しやすくなったのかもしれない。また、今年度の応用栄養学から新聞記事を紹介するグループワークを取り入れた。これまでも課題として行っていたものを、学生同士で紹介することで主体的に授業に参加している様子が覗えた。

しかしながら、栄養士実力認定試験の「栄養学各論」の成績は毎年短大平均を上回ることができていないことから、さらなる知識の定着にむけた工夫が必要である。

応用栄養学実習では指示された条件のもと献立作成、調理、プレゼンテーションを行っている。教員や学生のコメントや調理した実物を確認することで、自身の振り返りや気づきにつながっている。また、介護食や離乳食など様々な食形態を調理・試食することで、対象者に適した食事の必要性や工夫することの大切さに気付く機会となっている。さらに、現場で活躍する管理栄養士及び栄養士（系列高齢者施設及び附属保育施設）の先生に授業に参加していただくことで、より実践的なポイントについて学ぶことができたと考えている。あわせて現場の栄養士の方に直接コメントでいただくことは学生にとっても励みになっているようで、真剣にコメントに聞き言っている様子が覗えた。今年度は対象者の理解を深める機会として、学生全員が系列施設に伺い、高齢者の皆様に自分たちが作成したおやつを提供した。実際に喫食している様子や「おいしい」と感想をいただけたことは学生にとって学びが多かったと思われ、アンケートでも勉強になった。自分たちが作ったものをおいしいと言ってもらえてうれしかったなどの回答が多くみられた。また、青森県の地域課題の理解を深めるために昨年度に引き続きフォトボイスの手法を取り入れたグループワークを行った。このことによって、何が問題なのか、なぜ問題が解決されないのか、どのような取り組みが必要なのかなど、問題の本質や改善方法を考える良い機会につながっただけでなく、学生が主体的に参加し、興味深い発表になったことから次年度以降も継続していきたい。これまで、グループ内での作業負担の偏りを改善することが課題であったが、今年度から Teams を活用し、グループ作業を進めることを試みた。その結果、これまでのようにグループ内で時間を調整する必要がなく、おおよそのグループにおいて話し合いや課題作成についてもスムーズに行っていた。その結果、提出される献立や課題は例年よりも良い内容が多かった。

栄養指導論Ⅰではケーススタディ等を課題とし、授業内容の理解を深めるよう試みたが、期末試験での成績に反映されておらず、評価内容や基準を検討する必要がある。また、小テストなども授業の課題として実施したが、勉強の成果があまり反映されていなかった。授業評価アンケートにおいても栄養指導論Ⅰは学習時間が 30 分以内との回答が多く、もっと自己学習につながる工夫が必要である。栄養指導論Ⅱは栄養指導論Ⅰよりも授業評価アンケートの得点は良かったがこちらも学習時間が少ないことからもっと工夫が必要である。

栄養指導論実習では少人数のグループを作り、1人1人が主体的に参加できるように工夫し

た。各グループとも話し合っって作業しており、成果物もおおむね良い物であったことから、これまで学んだ知識や技術を活かすことができていると考える。さらに良い学びにつなげるため今後もより実践的なグループワークの方法を検討していく。

(根拠資料④⑤⑥⑦⑧)

今年度はコロナ禍の影響もあり、食育プロジェクトの活動は実施できなかった。今後は制限がある中でも学生が中心となって活動できる食育の方法を検討していきたい。

5. 今後の目標

- ・応用栄養学や栄養指導論が栄養士としての知識やスキルにどのように役立つのか、なぜ学ぶ必要があるのか、科目間のつながりも含め学生が理解できるようにしたい。
 - ・使用するデータ等の信憑性や妥当性など学生が根拠（エビデンス）の大切さを理解できるようにしたい。
 - ・対象者の特性をより深く理解し、対象者をイメージした食事提供や栄養管理ができるような学生を育成したい
 - ・グループワークにおける公平な評価方法を確立する
 - ・講義であっても学生が主体的に学習できる教授方法を検討する
 - ・課外活動等を活用した学生による食育指導の実践
 - ・栄養士実力試験対策講座の見直し（全科目短大平均以上を目指す）
- これらの目標を達成していくためにも自身の研鑽に努め、学生に還元できるようにする。

6. その他

- ・より充実した教育を実践できるように情報収集や知見を深めるため、積極的に外部の研修会や学術大会に参加するとともに、研究成果の発表を目指す。
- ・学生食育プロジェクトの活動の機会を増やしていきたい。
- ・平成30年度より取り組んできたフレイル予防講座での実績を基に、他学科、他学部の先生と共同研究を進め、地域高齢者の栄養改善にむけて継続して取り組んでいく。7
- ・ヘルスコミュニケーションを用いた食育活動の展開事業ではこれまでの事業を継続する他、魚食普及を中心とした新規事業取り入れ、立案した計画を遂行していきたい。

7 根拠資料

- ① シラバス ② 学生便覧 ③ 作成したスライド資料 ④ レポート課題 ⑤ 学生の成果物（献立、教材等） ⑥ 高齢期の栄養アンケート結果 ⑦ 栄養士実力試験結果 ⑧ 成績評価分布等